

## 【全体協議】

### 視点① 3つの資質・能力の関係性について

- ・動きのポイントの確認を4 / 4時間目にもってきていることに疑問がある。ポイントを最後に示すとなると、何をよい動きとして指導していけばいいのか。もっと早い段階でできている児童の動きを教師が価値づけして広めていく方がよいのではないか。  
⇒児童が試行錯誤を繰り返しながら運動したり考えたりする過程を大事にするために、最後に動きのポイントを確認する流れにした。実態によってはもっと早く良い動きを価値づけしてもよいと考えている。
- ・運動を楽しもうと「思考力・判断力」を働かせることがあるのか。  
⇒跳べるようになることで、さらに高く（遠く）跳びたいと考えるようになる。そこで、どうしたらさらに高く（遠く）跳べるだろうと思考力・判断力を働かせるようになる。

### 視点② 幅跳びの三つの資質・能力と学習過程について

- ・4時間目に動きのポイントをまとめるということは、教師は1～3時間目にどのような声かけや支援、かわり方をするのか。動きのポイントを教えていないのに、2, 3時間目に児童同士の教え合いは起きるのか。  
⇒教師は児童の意見や考えなどの発言を整理しながら学び合いを進めていく。児童なりの良い動きを「こつ」として取り扱い、最後にまとめる動きのポイントにつなげていく。3年生は、たくさん跳ぶ経験をする中で、自然に自分（個）から友達（集団）へと視点を広げていく。どのような学び合い・教え合いを行うことができるのかについては今後さらに検討したい。

### 視点③ 運動の場と競争の仕方について

- ・平場がないが、それだと2年生との違いがないのではないか。  
⇒3年生では運動（跳ぶ感覚）を楽しむ、4年生では結果（記録の向上）を楽しむことをねらい学習過程を考えている。検証 VTR からわかる通り、2年生までの跳の運動遊びで楽しむだけでは、片足踏み切り・両足着地が身に付かないことがわかる。3年生では、技能にポイントを置いて指導していくため、フワッと跳ぶなどの感覚を感じにくい平場でなく、技能が身につけやすく結果が一目でわかる岩跳び、箱跳びを競争の場とした。2年生との違いは、跳の遊びなのか技能のポイントにゴールをおくかの違いがある。平場については取り扱わないわけではなく、毎時間帯で行うジャンプウォーミングアップで行う時間をとっている。

## 【指導・講評】 大田区教育委員会 統括指導主事 志賀 克哉 先生

- ・陸上運動部は、実態把握（VTR）を行い、そこからスタートしている。片足踏み切り、両足着地は簡単なようではできない。予想と現実は違うということがわかった。
- ・中学年の中でも3年生に必要な技能や学び方、4年生に必要な技能や学び方と分けて設定していることがとても評価できる。その一方で、3年生を低学年の「運動遊び」に、4年生を高学年の「陸上運動」に近づけ過ぎないように注意する必要がある。3年生と4年生が乖離すると結果として系統性を失う。
- ・「スピードに乗った助走」「力強い踏み切り」が記録を伸ばすために大切。3年生では、助走のみでなく「力強い」踏み切りもしっかり身に付けておく必要があるのではないか。
- ・4時間目で技能ポイントをまとめているが、決してそれまで技能ポイントに触れないわけではなく、実態に応じてポイントに気付いた児童がいたら価値づけをし、全体に共有する。
- ・両足着地は安全第一につながる。安全面を考え、両足着地は児童の気づきを待たず指導すべきではないか。
- ・課題に応じた練習方法を課題とセットにして提示する授業が多い。練習方法を選択するだけでは十分思考・判断しているとは言えない。
- ・最後に実感を伴った知識をまとめることはとても大切、実感の伴っていない知識では意味がない。実感を伴った知識にするために、ポイントを提示する（まとめる）タイミングを早めることは、実態に応じて必要である。しっかり運動の特性を味わわせてから単元を終えるようにしたい。
- ・自分だけではわからないことが、ICTなどを利用し「見える化」することや、他者との関わりをもつことで分かる経験が大切。また他者との関わりを円滑に進めるためにゲーム性を取り入れることも大切。ゲーム化することで、得意な子が苦手な子たちの気持ちを知り、当事者意識や関わり合いが生まれる。
- ・単元が終わっても、運動の意欲が続くようにしてほしい。その意欲が他教科、他領域につながるとよい。